

プロジェクト情報

- 国名：マレーシア
- 事業名：障害者の社会参加支援サービスプロジェクトフェーズ 1 & 2（技術協力プロジェクト）
- 協力期間：2009 年から 2015 年
- 相手国機関：女性・家族・地域開発省

1. プロジェクトの背景・概要

マレーシアでは、CBR（Community Based Rehabilitation: 地域社会に根ざしたリハビリテーション）の概念を取り入れて障害者支援に取り組んでおり、地域に密着した CBR センターが障害児・者に対する種々の支援サービスに大きな役割を担っています。しかし、法整備の遅れや市民の意識などが要因となり、就労を含めた障害者の社会参加に対する十分な取り組みが行われておらず、障害者の自立支援は課題の一つとして残されています。

こうした状況の中、2009 年から 3 年間、「障害者の社会参加支援サービスプロジェクト（フェーズ 1）」が実施されました。主に支援付き就労の一環としてのジョブ・コーチ^{*1}制度の確立及び障害平等研修の導入を 2 本柱として位置づけて活動を行いました。フェーズ 1 のジョブ・コーチ研修の受講者の関わる企業の中には、障害者（知的障害、聴覚障害等）が、障害に合わせた業務内容と職場での理解により、障害のない従業員と同様に仕事を遂行し、一般的な賃金を得て、高い定着率を達成している企業があることが確認されています。さらに、フェーズ 2 では、雇用に関する障害者の社会参加を促進、改善することを目標に、これまでの成果をパイロットエリアからマレーシア全土へ拡大するとともに、ASEAN 各国への成果の普及も見据えて活動を展開しています。

^{*1}: ジョブ・コーチは、日本では「職場就労援助者」と呼ばれ、就労に向けた準備から雇用後の支援までを含めて、障害者の就労を支援します。障害特性の分析、就労先の確保、就労後の支援など、就労する障害者当人に対する支援だけでなく、職務内容についての助言など雇用先の企業の上司や同僚もその活動の対象とします。障害の程度も職場環境も多様であることから、個々に異なる対応が必要となります。

2. ジェンダー視点から見た途上国の女性障害者の状況

障害を持つ女性は、障害者としての差別に加え、女性としての差別も受けるという複合差別を受けています。一般的に、女性障害者は、男性障害者よりも、あるいは、障害を持たない女性よりも、医療や教育、職業訓練を受ける機会が限られています。加えて途上国では、貧困や

女性の地位が低いことなどから、その機会はさらに限られます。多くの国で、女性障害者の雇用の機会は、教育や職業訓練を受ける機会がないこととも相まって、非常に限られたものになっています。世界 51 か国での WHO 調査結果の分析^{*2}によると、障害のない男性、障害のない女性、男性障害者、女性障害者の雇用率は、それぞれ 64.9%、29.9%、52.8%、19.6%となっています。

^{*2}: WHO (2011), World Report on Disability

3. ジェンダー視点から見た効果

(1) 女性ジョブ・コーチの育成

プロジェクトが実施したジョブ・コーチトレーニングコースの参加者のうち、約 7 割が女性です。そのうち、実際にジョ



ブ・コーチとしての支援活動の中心になる CBR センターの職員と NGO 関係者は、8 割以上が女性となっています。プロジェクトでは、研修等を通じて能力向上の機会を提供することで、女性のジョブ・コーチ育成を図りました。これらの女性人材により女性への配慮が進むことで、女性障害者のニーズと合致し、女性障害者のジョブ・コーチ制度の利用が増加すると期待されます。

(2) 女性障害者の社会参加促進

ジョブ・コーチ制度により支援することによって、女性障害者の社会参加を促進しています。上述のように女性ジョブ・コーチが数多く育成されていることも、女性障害者の社会参加促進につながっていると考えられます。プロジェクトが実施したフォローアップ調査では、ジョブ・コーチが支援して就労した障害者 275 名のうち、女性は 102 名（約 37%）です。比較的多い就職先は、小売業、レストラン、工場などとなっています。

数多くの女性ジョブ・コーチの育成は、女性障害者の雇用を含めた社会参加促進に貢献します。ジョブ・コーチ制度がマレーシア全土に、さらには ASEAN 各国へと普及することで、ASEAN 地域全体で女性障害者の社会参加が促進することが期待されます。